電子音とパーソナリティー特性の関係に関する研究

1230429　岡田　直人

指導教員　日道俊之

研究背景

現代音楽において DTM (Desktop Music) をはじめとして、電子音を利用した音楽は当たり前となっている。生の楽器演奏と録音した演奏とを比較してパーソナリティー特性に着目した研究が多い。しかし、多くの先行研究では、電子音とそうでない音を刺激として利用し、比較されていない。音楽とパーソナリティーの関係をより多角的に分析するため、本研究では電子音に注目し，曲の印象と big five の関係を検討した。

研究目的

電子音で構成された曲を好む人と、ピアノの音で構成された曲を好む人とでは、パーソナリティーに違いがあるのかを検証する。また、開放性が高いと電子音で構成された曲をピアノの音で構成された曲よりも好むという仮説を検証する。

調査・分析方法

「天国と地獄」と「エリーゼのために」の 2 曲に対し、電子音とピアノの 2 種類で演奏した 4 曲を用意した。4 セッションに分けて実験し、それぞれ曲を流す順番を変えた。各セッションでは 4 曲を PC 上で流し、一曲を聴いてもらうごとにその曲の印象評定のアンケートに回答してもらった。最後に、TIPI を用いてパーソナリティー傾向を測定した。

分析結果

因子分析の結果、因子を構成する音楽評定が曲によって異なったため、先行研究の因子をそのまま使用することにした。分散分析の結果、エリーゼのためにでは、ピアノは明るさと緊張性が低く、電子音は親和性が低くなった。天国と地獄においては、ピアノでは明るさと緊張性が高くなった。相関分析の結果では、電子音への印象評定と開放性には有意な関係は無かった。

考察・結論

開放性の高い人は身体性も高いことが示されており，本研究では電子音が身体性を高めると予測したが、この仮説は支持されなかった。身体性を電子音が高めるという予測が間違っており、電子音だけでは身体性を高めることはできず、他の要素と組み合わさった時に身体性を高めるという可能性があると考えられる。また、研究で実験に使用した電子音がピアノの音に似た音であったため、電子音とは関係のない印象を与えてしまっていた可能性がある。